

全国で唯一「鬼」のつく町 ：愛される医療を目指して



鬼北町は、全国で唯一「鬼」がつく町名として平成17年1月に町村合併によりできた町で、愛媛県の西南部に位置し、総面積約242km²で南予の生活圏の中心である宇和島市に隣接している。町の約78%を森林が占め、四方を1,000m級の山が連なる四国山地に囲まれた盆地で、典型的な中山間地域である。また、日本最後の清流と呼ばれる四万十川の支流のひとつとして町民に親しまれている広見川が町の中央部を貫流している。

平成29年10月1日現在の人口は1万661人、高齢化率は43.1%で人口減少と高齢化が進んでいる。町中心部に2つの病院と開業医が集中しており、中心部から離れたところに国保診療所が4か所あり、地域医療を担っているという状況である。



町総合戦略策定のために実施した町民アンケート調査では、重点を置くべき施策としては「医療体制の整備」が最も多く、次いで「上水道の安定供給」「介護・

愛媛県鬼北町長

兵頭誠亀

message

高齢者福祉の推進」と全体的に福祉の充実を求める声
が大きい結果になっている。今後さらに高齢化が進展
する状況の中で、当町が進めてきた保健・医療・福
祉・介護の総合的な取り組みの期待はさらに高まるも
のと認識しており、現状と今後の課題について述べて
みたい。



町内にある4か所の国保診療所は、平成23年度から
医師不足が顕著となり、平成24年度には地元開業医に
診療委託を行うなどの対応策を講じてきた。平成28年
度には新たに医師1名を招聘することができ、現在は
3名の常勤医師が勤務している。診療所の重要な役割
は、地域住民への医療の確保と健康の保持増進である
ため、病気の早期発見と治療に努めるとともに、予防
接種の実施をはじめ地元学校医の就任や保健センター
が実施する健診や各種保険事業の協力を行っている。

地域住民の減少に伴い、診療所の運営はますます厳
しくなっている。また、地形的に居住地が分散し、
ほかに医療機関がないこの地域では、移動手段のない
高齢者等に対する医療面での支援や地域包括ケアを構
築するうえで、診療所は重要な役割を担っており、こ
れからも地域医療には欠かせない存在である。

一方、町中心部に2か所の病院があり、町立北宇和
病院はもともと県立病院であったが、平成18年に町立
病院（公設民営）として再生した。特定の医局とは関
係なく、常勤医師6名のうち院長含め2名は指定管理
された社会福祉法人旭川荘所属で、4名が町所属であ
る。診療圏は当町のほか宇和島市の一部、高知県西南
部にも及んでいる。

現在5科目を診療科目とし、24時間体制で救急患者
の受け入れを行っている。また、入院棟は100床
（一般55床・療養45床）で、地域に密着した病院とし

ていつでもできる限り幅広く診るという「かかりつけ
医」としての役割を担っている。今後さらに高齢化の
進展により、地域医療に重要な役割を果たす総合診療
専門医の育成を図ることが、地域医療の医師確保につ
ながることと期待している。

さらに北宇和病院を指定管理している社会福祉法人
旭川荘南えひめ病院（診療科目6科、病床数132床）
との連携により、医師との協力等それぞれの病院が担
う役割を明確にすることで、広域的な連携が図られる
ものと考えている。



子育て支援施策も兼ねて、平成28年度から医療費助
成では県内でいち早く18歳までの医療費を無償化し
た。さらに、地域住民が病気にならない、病人をつく
らないために、まず予防医療の推進に取り組み、重症
化する前に病気を発見しようと、各種検診受診を積極
的に進め、検診や健康教育・相談など計画的に実施し
ている。また、健康体操として「鬼の里マーチ体操」
を普及している。これは作詞、作曲、歌、DVD作製ま
で役場職員が手づくりした当町ならではのオリジナル
体操で、利用者から好評を得ている。

こうした地道な取り組みにより、平成28年度後期高
齢者一人当たりの医療費は、愛媛県内20市町の中で2
番目に低く、特定健診の受診率は約47%と高い数値を
示しており、町民の健康に対する意識も高まっている
と実感している。町では町民の皆さんに今後もさらに
健康づくりの意識を高めてもらうよう施策を充実させ、
また、町立国保診療所と町立北宇和病院との連携
を図りながら、地域包括医療・ケアの中心的な役割を
果たすことで「地域医療の確保と安心して住める町づ
くり」を目指して、鬼に笑われないように…鬼のよう
に仕事に努めていきたい。